

ポスター報告 23

栗川 治 立命館大学大学院先端総合学術研究科

#報告題目 障害のある教員の社会運動史——1970年代以降の当事者団体の運動を中心に

#報告キーワード 障害のある教員 社会運動史 当事者団体

#報告要旨

問題の背景と先行研究

障害学は障害者当事者運動と分かちがたく成立してきたが、障害当事者運動の歴史研究は、障害者の生活についてのものが中心であり、障害者の労働についての研究は、障害者雇用、すなわち障害者を雇用の客体としてとらえる側からのものに終始してきた(手塚 2000)。労働の主体としての障害当事者側からの研究は、イギリスでの事例を紹介したもの(田中 2005)や福祉的就労に関わるものが散見されるのみである。教育に関する障害学研究は多くあるが(堀監訳 2014)、ほとんどが障害のある子どもたちの教育に関するものである。関連する研究でも、傷痍軍人となった教員の事例(山下麻衣編 2014)や、大阪青い芝の会の関連で車イスの教師を創る会への言及(山下幸子 2008)があるが、障害のある教員を主題とする研究は、教育学において昨今ようやくその端緒に就いたばかりである(羽田野ほか編 2018)。

目的と方法

本研究の目的は、障害教員の当事者運動の資料を収集し、事実を記述し、その主張を分析して、障害教員運動が求めてきたことを明らかにすることである。

そのための方法として、まず障害教員の当事者運動の記録、資料を収集し、文献調査を行う。また、運動に関わった障害教員当事者にインタビューを実施する。これらの資料をもとに歴史事実を記述する。その上で、障害教員当事者運動史の記述から、当事者の主張内容を抽出し、次の各観点の尺度を用いて分析する。①実態分類=病・障害の5つの契機(立岩 2018): 苦痛、死(への傾き)、できないこと、異なること、加害性の各契機を用いて、障害教員当事者の主張を分類する。これにより、旧来の機能障害(できないこと、disability)の観点だけでは捉えられなかった様々な病・障害をもつ障害教員の課題を正當に位置づけ

ることができる。特に心臓等の内部障害のある教員による勤務軽減等の主張を検討する上で、苦痛、死の契機を考慮することは重要である。②志向性分析＝構造的統合と文化的同化のマトリックス(石川 1992): 障害教員が働く上で、一般社会への統合(普通校勤務)を求めるのか、特別な場(特別支援学校)への排除を受容するのか。他の障害のない教員と同じように働けると主張(同化)するのか、障害の特性に応じた他とは異なる働き方(異化)を主張するのか。「統合⇔排除」、「異化⇔同化」を上下、左右の座標軸にして分析する社会学の方法を用いて、障害教員運動のめざす方向性や主張を類型化し、当事者団体の内部対立や分裂を考察する。

尚、本研究では、日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守して、調査協力者のプライバシーの保護、人権の尊重を徹底する。

研究内容

本研究では、障害教員運動史を、四つの時期に区分し、各時期の運動を主に担った団体に着目して、研究を進める。①黎明期(1970年代以前): 点字受験・採用を求める視覚障害者労働問題協議会、全日本視覚障害者協議会等の運動、②勃興期(1980年代以降): 全国視覚障害教師の会、全国聴覚障害教職員協議会の結成、③激動期(1990年代以降): 「障害」を持つ教師と共に・連絡協議会の全国運動展開、対立と分裂、④展開期(2000年代後半以降): 障害者権利条約成立以降の制度・政策の変化、障害のある教職員ネットワーク等の動き。

文献

- 羽田野真帆・照山絢子・松波めぐみ編, 2018, 『障害のある先生たち——「障害」と「教員」が交錯する場所で』生活書院.
- 堀正嗣監訳, 2014, 『ディスアビリティ現象の教育学——イギリス障害学からのアプローチ』現代書館.
- 石川准, 1992, 『アイデンティティ・ゲーム——存在証明の社会学』新評論.
- 田中耕一郎, 2005, 『障害者運動と価値形成——日英の比較から』現代書館.
- 立岩真也, 2018, 『不如意の身体——病障害とある社会』青土社.
- 手塚直樹, 2000, 『日本の障害者雇用——その歴史・現状・課題』光生館.
- 山下麻衣編著, 2014, 『歴史のなかの障害者』法政大学出版局.
- 山下幸子, 2008, 『「健常」であることを見つめる——1970年代障害当事者／健全者運動から』生活書院.